

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

<http://www.sgepss.org/sgepss/>

第193号 会報 2007年9月14日

目	次
第121回総会報告 1	訃報 14
会長挨拶 2	地球惑星科学関連学会合同大会発足の頃を 振り返って 行武 毅 15
田中館賞審査報告 3	国際学術交流事業助成金受領の報告 尾花由紀 . 17
田中館賞を受賞して 山本 衛 4	国際学術交流事業受領の報告 長谷英彰 18
第122回総会開催のご案内 5	男女共同参画検討提言WG報告 18
第24期第2回運営委員会報告 5	アウトリーチ部会報告 19
第24期第3回運営委員会報告 7	関連研究集会のご案内 20
評議員会報告 9	関連公募のご案内 20
アジア・大洋州地球科学会 (AOGS) について	学術賞・研究助成のご案内 21
-第4回年会の報告と今後の予定- 西田篤弘他 . 10	学会賞・国際交流事業関係年間スケジュール . 23
SGEPSS60周年記念学会史寄稿のお願い 10	SGEPSSカレンダー 23
秋学会での会費納入 10	賛助会員リスト 24
黎明期SGEPSSの指導者像と足跡 加藤 進 11	

第121回総会報告

第121回総会は、2007年5月19日から24日まで幕張メッセ国際会議場において行われた日本地球惑星科学連合2007年大会の3日目である、5月22日12時30分から13時30分まで301B会場において開催された。出席者120名、委任状118名（定足数225）であった。

まず、高橋幸弘運営委員による開会の辞の後、歌田久司会長の提案により小川康雄運営委員が議長に指名された。会長挨拶（*本号に別途記事あり、以下同様）の後、田中館賞授与式に移り、第155号が山本衛会員に授与され、会長より審査報告（*）がなされた。

ついで、昨秋の学会における学生発表賞（オーロラメダル）受賞者（白井洋一、亀田真吾、永田肇、村上尚美、岡崎良孝、小野友督、加藤真理子、佐藤創我、永田大祐、計9名）が表彰された（*）。

諸報告に移り、石井守運営委員より、前回総会以降に開催された第239/第24期第1回、ならびに第24期第2回運営委員会の報告（*）がなされた。次に、SGEPSS創立60周年記念事業（*）について、石井守運営委員より説明があった。次に、山本衛運営委員より会費

納入についての周知があった。さらに、学校教育ワーキンググループの活動について、中井仁会員より報告があった。

最後に、今秋の総会・講演会をお世話いただく名古屋大学太陽地球環境研究所の野澤悟徳運営委員より、準備状況について紹介があった。

第121回総会議事次第

1. 開会の辞
2. 議長指名
3. 会長挨拶
4. 田中館賞授与
5. 田中館賞審査報告
6. 学生発表賞表彰
7. 諸報告
- (1) 第24期第1回・第2回運営委員会報告
- (2) SGEPSS創立60周年記念事業
- (3) 会費納入のお知らせ
- (4) 学校教育ワーキンググループ活動報告
8. 次期開催地（名古屋大学太陽地球環境研究所）
9. 閉会の辞

(石井 守)



会長挨拶

第24期会長 歌田久司

冒頭に学会としてうれしいニュースをお知らせします。村山泰啓会員・石井 守会員・久保田実会員の「オーロラ画像インターネット配信による科学観測の理解増進」に対し、文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）が贈られました。また、深尾昌一郎会員らの著書『気象と大気のレーダーリモートセンシング』に対して、大川情報通信基金大川出版賞が贈られました。さらに、向井利典会員はCosmonautics Federation of Russia presium bureauから、ガガーリン・メダルを受けられました。これは、西田篤弘会員、松本紘会員に続き、日本で3人目のことだとのこと。以上の受賞に対して、会員一同でお慶び申し上げたいと思います。

さて、振り返りますと、宇宙3機関の統合、国立大学等の法人化、学術会議の体制改革などが次々と実施されたのに加え、学会事務センターの倒産などという不測の事態もあって、21世紀初頭は当学会にとっても大変動の時期でした。中でも、2005年4月に長年の念願であった日本地球惑星科学連合が発足したことは、学会のあり方に対する私達の考え方を一変させるような出来事で、それまで行なわれてきた学会の将来構想にも再検討が求められることになりました。現在、連合では公益法人制度改革にあわせて、法人化の準備を進めているということです。このような現状も踏まえ、今後は、連合傘下における当学会のあり方と同時に、連合の発展に当学会がいかに貢献できるかが問われることになると考えられます。欧文誌EPSの発行運営体制についても、見直しの必要な時期に来ているように考えられます。これらさまざまな問題を含む学会の将来構想については、それと密接な関係にある学会名称の問題をも含めながら、過去2期にわたって将来検討ワーキンググルー

プにおいて検討を行なってきたところです。しかし、連合の発足を機に、活動を一時中止としました。今期においては、まず運営委員会において連合体制のもとでの学会の方向性等についての議論を行ない、この世代が合意できる内容の叩き台を作成した後にさらに広範な議論を展開するという段階を踏みたいと思います。

現在当学会をとりまく諸情勢は、相変わらず厳しい状況にあります。大学等においては、21世紀C OEプログラムに続くグローバルC OEプログラムが開始される一方、法人化して最初の中間評価が始まるようとしております。また、先行して独法化した機関においては、次期中期目標・計画の策定にとりかかっているところも多いと思います。政府の経済財政諮問会議においては、国立大学の運営費交付金にも競争原理を導入することが検討されているようです。一連の流れは、研究機関間に競争原理を持ち込んで教育・研究および科学・技術の発展をもたらそうというものですが、このような中で、組織の枠組みを越えた学問の発展を担うのが学会の役割であり、その重要性はますます高まっていると言えます。また、競争の激化とともに今後も様々な組織改編や体制の改革などが行なわれることが予想されます。必要に応じた意見発信や提言など、学会として対応すべき事柄には適切かつ可能な限り迅速に対応したいと考えます。

当学会の運営に関しましては、これまでに引き続き、他分野・他学会との連携や新たな分野の開拓などによる秋学会のさらなる充実を目指した取り組みをしていきます。前期に導入したコンピナー制などの効果がすでに表れてきているところですが、今後も分野横断型セッションあるいは他学会との合同セッションの開催などが積極的に行なわれるのを望みます。一方、昨年策定された第三期科学技術基本計画においては、「社会・国民に支持され、成果を還元する科学技術」「人材育成と競争的環境の重視」等がうたわれ、学会の果たすべき役割の重要性が一段と強く述べられております。その中の一つである研究成果の社会への還元として、当学会では数年前より秋季大会において記者発表や一般向けイベントなどのアウトリーチ活動に取り組んできたところです。今秋の一般向けイベントは火山を主テーマとする内容で行なうべく準備が進められています。今後も、このような取り組みへの会員各位のご協力をお願い致します。さらに、人材育成や男女共同参画問題等、学会の取り組むべき課題はますます多くなっております。その中には連合という大きな単位で対応すべきものがありますが、まだ連合内部の組

織体制が必ずしも十分に機能するに至っていないため、結果として今期は全ての運営委員が複数の担当項目を持つことになりました。会員のボランティア精神の高さは当学会の誇るべき美点ではありますが、過度の負担にならないよう、連合側に対応できる組織体制が整うのに合わせて随時移行措置をとりたいと思います。

今年には当学会を含む地球惑星科学にとって研究上の大きなイベントが二つ控えております。9月に実施される予定の「かぐや (SELENE)」による月探査ミッションと、国際統合掘削計画においてライザー型掘削船の「ちきゅう」の本格的運用が10月に開始されることです。これらの実現に向けて関わってこられた会員各位に、長年のご苦勞に敬意を表する次第です。また、これらのプロジェクトを含め、会員各位の研究活動から大きな科学的成果がもたらされることを祈念致します。

最後になりますが、今年には当学会の前身である日本地球電気磁気学会が1947年5月12日に発足してから丁度60年目に当たります。人間で言えば還暦に当たりますことから、荒木元会長をはじめとする方々から、学会の過去の歩みとして主な節目にあった事項の記録を収集し、将来の資料とする事業を行うべきことのお勧めをいただきました。また、評議員会においては、各会員が保有している貴重な書類や資料等を保存することの重要性が指摘されました。以上を踏まえ、運営委員会では、60周年記念事業として記録の保存に取り組みたいと考えております。また、名古屋大学のお世話で開催する秋の総会ならびに講演会において、記念の特別セッションも企画しております。以上、会員各位のご協力を再度お願いする次第です。

田中館賞審査報告

受賞者 山本 衛 会員

論文名 「中緯度電離圏イレギュラリティの構造と発生機構に関する研究」

山本衛会員は、MUレーダーによる電離圏E領域の沿磁力線イレギュラリティ (Field-Aligned Irregularity, 以下FAIという) に関し、複数のレーダーを用いた観測や、SEEK (Sporadic-E Experiment over Kyushu) およびSEEK-2と名付けられた地上観測と衛星ロケット観測を組み合わせた総合観測を企画および実行し、最近の電離圏研究の発展に極めて大きな貢献を果たした。

山本会員は、MUレーダー観測により従来は「静

か」であると考えられてきた中緯度領域でも強いFAIが発生し、日没後の時間帯には「準周期エコー」と名付けられた周期数分から十数分の波動現象があることを発見した。さらにこれが北西から南東方向に延びる南西向きの水平伝播であることを明らかにした。

この準周期構造の成因に関して、当初は大気重力波によるEs層の高度変調による説が提唱され、1996年にこれを検証する目的で観測ロケットを2機打ち上げ、地上のレーダーや光学観測装置との同時・同領域観測を行う総合観測SEEKが実施された。山本会員は計画段階からこれに参加して中心的な役割を果たし、観測ロケットによる電場の直接観測とレーダーのFAIエコーによる電場の推定が一致すること、FAIに伴って局所的に発生した分極電界の大きさがダイナモ電場の数倍～十倍の大きさに達すること、などを初めて明らかにした。さらに、Es層生成が背景の中性大気風速のシアでよく説明されること、このシアが極めて強いいためケルビン・ヘルムホルツ不安定 (Kelvin-Helmholtz Instability: KHI) を伴うと考えられることを明らかにした。またEs層を大きく超える高度において電界に大気重力波によると見られる波状構造が存在するという興味深い結果も得ている。これらの結果は、中性大気と電離大気の相互作用が電離圏ダイナミクスに与える影響が大きいことやEs層周辺に強い分極電界が生成されることを強く示す一方、当時のモデルが予測したEs層の大きな高度変調には否定的であり、準周期エコーの成因の研究には新たな展開が求められることになった。

SEEKの結果を受けて、準周期エコーの成因として、中性風速のシアから発生するKHIによるとする説と、中性大気風速とE領域の電子密度の不均一性から生じる分極電界によるとする説が提唱された。山本会員は、後者に関連してEs層と分極電界の生成に関する計算機シミュレーションを行い、下層大気から上方伝播する大気重力波によるEs層の変調とFAI生成の可能性を示した。

次に山本会員は、準周期構造の成因にせまる目的で、2002年に主任研究者としてSEEK-2を実施し、発達したFAIに向けて15分間隔で2機の観測ロケットを打ち上げ、同時に地上から2台のレーダーをはじめとする観測を行なうことに成功した。そして、FAIの水平構造を2台のレーダー観測から明らかにした他、ロケット観測された分極電界に波状構造があること、Es層と風速シアにより対応があること、Es層が複数の層からなる多層構造を持つことなどを示した。準周期構造の生成に関しては、観測データは事前に提唱された二種類のモデルが混在している状況を示し

ており、中性大気中の強い変動（大気重力波ないしKHI）がEs層の空間不均一を生み、それが分極電界を発生するとともにFAIに準周期構造を作り出すことが示唆された。

山本会員は、これら一連の総合観測に基づいた研究だけでなく、大気レーダーの新しい観測法を用いたFAIの解明も進めてきている。米国コーネル大のHyse博士との共同研究では、MUレーダーを用いた初めてのFAIイメージング観測を成功させ、FAIの水平構造と伝播を明らかにした。また、情報通信研究機構の斉藤享会員と共同でMUレーダーの受信チャンネル数を最大29にまでに改良して感度と精度の向上をはかり、一般的なEs層高度よりも高い領域にもFAIが存在することを示し、SEEK-2で発見されたEs層の多層構造を検証することにも成功した。

山本会員が明らかにした中緯度電離圏のダイナミックな姿は、国内外の関連研究者に大きな刺激となって当該分野の研究を活性化し、さまざまな発展をもたらした。また山本会員は、赤道大気レーダー（Equatorial Atmosphere Radar: EAR）の開発研究にも深く関与し、赤道大気の大気圏～成層圏に関する観測及び赤道・低緯度電離圏に見られるスプレッドF現象の研究にも大きな貢献をしている。

山本会員の研究活動は当該分野の研究者から極めて高い評価を得ており、上記中緯度E領域FAIの準周期構造の発見によって、1996年に大林奨励賞が授与された。そしてその後の活動を通じて研究者として大きく成長し、ここに述べてきたような顕著な研究業績を残した。学会活動に関しても、SGEPSS運営委員を平成15年から現在まで努めている他、日本学術会議では第19期電波科学研究連絡委員会および第20期IAGA小委員会の委員を務めるなど、自らの研究課題の追求にとどまらず広く関連研究分野の発展にも大きな役割を果たしている。これらの地球電磁気・地球惑星圏科学における優れた研究業績と活動を評価し、評議員会の審査と議を経て、山本衛会員に田中館賞を授与することとした。



田中館賞を受賞して

山本 衛

このたび「中緯度電離圏イレギュラリティの構造と発生機構に関する研究」で田中館賞を受賞させていただき、まことに光栄に存じます。ご指導をいただいた諸先生方、研究協力とともに時には貴重なご批判をいただいた研究者諸兄、ともに研究をすすめてくれた大学院生の皆さんに感謝いたします。

この研究は、1989年頃のMUレーダーによる電離圏E領域の磁力線直交方向の観測を端緒とします。MUレーダーは、加藤進先生、深尾昌一郎先生、津田敏隆先生、佐藤亨先生はじめ多くの先生方の努力による1984年の完成から約5年たち、当初予定された大気乱流エコーによる下層～中層大気の観測と、電離圏プラズマからのインコヒーレント散乱エコーによる電離圏観測がどちらも軌道に乗って論文が数多く出され始めていました。深尾先生と佐藤先生による電離圏の磁力線直交方向の観測が、F領域を対象として始まっておりまして。私は博士課程在籍中の高見友幸さんと議論して、観測パラメータを小変更すればE領域エコーの観測効率が非常に上がることに気が付いたところ、周期数分の波状構造を示す、いわゆる「準周期エコー」が現れました。いちばん初めに取ったデータをもとに1991年に論文を出し、以後、様々な研究をつづけて田中館賞受賞に到ったわけです。この研究テーマにめぐり合えたことは、まさに幸運でありました。

本研究の過程においては、様々な観測を行ってまいりました。当初はMUレーダーの性能を生かした観測で満足できましたが、数年で限界を感じました。客員教授であったRoland Tsunoda先生と共同研究を進めていましたが、1993年に、先生がちょうど開発しておられた小型レーダーをMUレーダーの北方に持込み、同時観測をいたしました。準周期エコーの波面が北西 南東に延び南西方向に伝搬することが明らかになりましたが、これが一連の複合観測の始まりであったと思います。また深尾先生とともに米国にTsunoda先生を訪ねた折、たまたま同日に訪問して来られた小山孝一郎先生を交えて議論が白熱し、これをきっかけとして内之浦から観測ロケットを2機打上げ、レーダーを初めとする地上装置で同時・同領域観測を行うというSEEK (Sporadic-E Experiment over Kyushu)が1996年と2002年に実現しました。規模が大きいため関連する先生方も非常に多く、観測ロケット関係ではMiguel Larsen先生(TMAによる電離圏の風速観測)、Rob Pfaff先生・中村正人先生(電場

観測)、Paul Bernhardt先生(ビーコン観測)、小野高幸先生(インピーダンスプローブ)、岩上直幹先生(ロケット姿勢計)、阿部琢美先生(ラングミュアプローブ)、高橋隆男先生(磁力計)ら、地上関係では小川忠彦先生・中村卓司さん・塩川和夫さん・大塚雄一さん(MUレーダーと大気光イメージャ)、丸山隆先生・石井守さん・斎藤享さん(イオノゾンデや小型レーダー)はじめ多くの方々の協力をいただきました。2回のSEEK観測では、どちらも早川基先生に実験主任を務めていただきました。私はロケット観測に関して全くの素人でしたので、ずいぶんお手間を取らせただけです。2回目のときは数多くの不具合に見舞われたため、さすがの早川先生も「一時はダメかと思った」そうです。種子島からのレーダー観測を監視してロケット打上げタイミングを決める係であった私は、かなり緊張いたしました。おかげさまで2回のSEEK観測はいずれも成功といえる水準の成果を挙げましたし、私は成果以外にも多くの経験を得ることができました。研究の理論面においては、齊藤昭則さんの協力をあおぎ、大学院生数名と電離圏の分極電界生成と伝搬に関する計算機シミュレーションの構築を始めました。途中から参加してくれた横山竜宏さんの頑張りでも大幅なレベルアップが果たされ、磁力線が斜めに配置された中緯度電離圏における電離圏の振舞いが明らかになり、E領域とF領域が磁力線を通じて相互作用する様子がわかってきました。これをもとに、最近ではE領域・F領域相互作用の解明をすべくMUレーダーと小型レーダーによる新しい複合観測を始めています。

本研究が受賞に至った背景には、関連する研究の広がりがあったのだと思います。大気光イメージャに代表される光学技術を用いた大気観測、日本全国のGPS受信機網GEONETにもとづくGPS-TEC観測の実現、大気レーダーによるイメージング観測など、新しいことが可能になってきました。研究仲間の先生方がこれらで立派な業績を挙げておられるのは大変喜ばしいことです。私自身もインドネシアの赤道大気レーダーに深く関わることになり、研究の領域が広がってきました。様々な要素の結果でしょうが、学会講演会における「電離圏」セッションが、ここ10数年のうちに規模と中身の両面で大きく成長したという印象をもっています。もう大気圏と電離圏をまとめて議論することが普通になっています。私は、新しい観測手法に取組み、複合的な手法・視点を大事にしながら、今後も引き続き研究を進めて参ります。皆様、今回は本当にありがとうございました。

第122回総会開催のご案内

第122回総会を以下の日時に開催します。

開催日時：9月30日(日)

15:45～17:45

開催場所：野依記念学术交流館2階
カンファレンスホール

重要な議事がありますので会員の方はぜひご出席ください。やむを得ず欠席される場合には、事前に同封の委任状を会長宛てに郵送いただくか、運営委員にお渡しください。

第24期第2回運営委員会報告

日時：2007年5月20日(日) 17:10～20:20

場所：幕張メッセ 国際会議場 203号室

出席者(敬称略)：歌田久司、津田敏隆、阿部琢美、石井守、石川尚人、臼井英之、小川康雄、河野英昭、北和之、木戸ゆかり、齊藤昭則、高橋幸弘、田口真、長妻努、野澤悟徳、山本衛、清水久芳(17名/定足数11人)

欠席者(敬称略)：吉川一朗

1. 前回運営委員会議事録の承認(石井)
・承認された
2. 協賛・共催関連(小川)
・後援「第5回火山都市国際会議(Cities on Volcanoes 5 conference)」(主催：島原市、日本火山学会)、日時：2007年11月19日-23日、場所：雲仙岳災害記念館、島原復興アリーナ
・後援「第7回アジア地震学会連合総会(Asian Seismological Commission)」(主催：日本地震学会)、日時：2008年11月24日-27日、場所：つくば
3. 入退会(小川)
・入会者11名、シニア会員1名、退会者6名を承認した。

- ・入会者（11名）
 - 正会員（一般）4名：平木康隆（所属：京都大学、紹介者：高橋幸弘・足立 透）、富川喜弘（極地研究所、麻生武彦・堤 雅基）、中村良介（産総研、今村剛・高橋幸弘）、佐藤毅彦（宇宙航空研究開発機構、中村正人・岡野章一）
 - 正会員（学生）7名：豊田丈典（東京大学、村上 豪・吉岡和夫）、岡崎良孝（東北大学、村田 功・藤原 均）、鈴木一成（東京大学、齋藤義文・長谷川 洋）、大島 亮（東京大学、中村正人・今村 剛）、空華智子（東京大学、中村正人・今村 剛）、佐藤由佳（東北大学、小野高幸・飯島雅英）、鈴木秀彦（総合研究大学院大学、田口 真・堤 雅基）
 - ・シニア会員（1名）：吉田漣
 - ・退会者（6名）
 - 正会員（一般）4名：細谷 亮、小竹論季、村田洋三、吉田直文
 - 正会員（学生）1名：犬伏裕之
 - 正会員（シニア）1名：並川富一
4. Web サーバーについて（臼井）
- ・HP 表紙デザインの見直しについて報告された。
5. 会計関係（山本・石井）
- ・監査委員として船木實会員（極地研）と小原隆博会員（NICT）の2名を選出した。
 - ・H18年決算報告
 - 単年度納入率は全体平均76.4%と低いが、前年度分込み納入率は91.7%となった。予算額を上回る会費収入を得ることができ、財政的には概ね健全であると考えられる。
 - 海外会員の会費納入率が良くないが、連絡体制を改善することにより、納入率を上げる努力を行う。MMB システム英語版の運用が開始されたこと、今後、海外会員にも督促を行うことにより、可能であると考えられる。
 - 監査の関係により、出版助成金を特別会計扱いとした。
 - 業務委託量が30万円ほど予算を超えたことに関して、調査中。
 - 会報発送費が予算を大きく上回った。
 - 全体としては、176,967円繰越金を取り崩したが、予算で想定した取り崩し額919,925円と比較すると小さい。取り崩しは、秋学会投稿システム・会費納入システムなど新規事業立ち上げによるもの。
 - ・単年度納入率を上げる必要があるという意見が出された（以前は96%程度）。具体的な方法については、今後議論する。
6. 国際交流事業応募書類審査（石井）
- 5件の応募があり、議論の結果、尾花由紀会員、坂野井和代会員、長谷英彰会員の申請を採択した。
7. 秋学会（第122回講演会）準備状況（野澤）
- ・9月28日～10月1日に名古屋で行われる予定の秋学会までの準備日程と、使用予定の会場についての報告がされた。今後の予定は、6月15日 予稿受付開始、7月13日予稿受付終了、8月17日プログラム決定、9月初旬冊子体プログラム発送、9月7日プログラム、予稿集のWeb 閲覧開始、9月28日～10月1日秋学会。会場は、名古屋大学野依記念学术交流館他。
 - ・2件の特別セッションが提案され、開催について両者共に承認された。
 - (1) 「STE研究における地上ネットワーク観測の現状と将来展望」（提案者：藤井良一（名古屋大学太陽地球環境研究所）、佐藤夏雄（国立極地研究所）、津田敏隆（京都大学生存圏研究所）、湯元清文（九州大学宙空環境研究センター）、小野高幸（東北大学大学院理学研究科））
 - (2) SGEPSS 創立60周年記念特別セッション：地球電磁気学の歩み（運営委員会）
8. 学会連合について（高橋）
- ・運営会議が5月19日に開かれた。これまでは2年毎に委員長が退任し、副委員長が委員長と交代することになっていたが、「留任をさまたげない」ことになった。
 - ・複数のSGEPSS 会員が委員・委員長・副委員長に、新任・再任となった。
 - ・連合のアウトリーチ活動に関して、広報・活動案はあるものの、人手が足りない状況であることが報告された。講師の派遣等、SGEPSSの連合アウトリーチへの協力が呼びかけられた。
9. アウトリーチ活動について（長妻・北）
- ・秋学会のアウトリーチ活動費について科研費を申請していたが、不採択であった。
 - ・秋学会のアウトリーチ活動は、学会2日目（9月29日 土曜日）午後、名古屋市科学館において行う。講演者・展示物の内容等の詳細については、アウトリーチ部会にて今後調整を行う。
 - ・アウトリーチHPの改善を行う予定。
10. EPS 関係（齊藤）
- ・山崎委員長の退任により、次期運営委員長に齊藤委員が就任することが報告された。

・EPS誌運営委員会・テラパブ間、および、学会間覚書の案が提示された。連合大会期間中（5月22日）にEPS 運営委員会を行い、協議する予定であることが報告された。

・JGG の電子化は現在も継続中。公開は電子化が全て完了してから行う予定。

11. 男女共同参画関係について（木戸・長妻）

・4月の連絡会の内容について報告された。この中で、関西で行われた春の科学塾について紹介され、今後地方への展開を期待していることが報告された。

・秋学会での託児所（保育室）について、平日は名古屋大学内の保育園の利用ができるが、日曜日については別途調達する必要があることが報告された。

・5月19日に連合大会にて、男女共同参画セッションが開催された。

・ポストク調査については、秋までに報告書を作成する。

12. 学校教育WG 報告（北）

・3月10日、5月19、20日にWGが開催された。冊子編集作業は現在継続中。冊子の内容については、運営委員会の承認をとる予定。次期WGで内容を提示し、秋学会にて開催されるWGにおいて内容を決定する。

・学校教育WGも含め、アウトリーチ活動に対する財源の確保について議論された。

13. 会報発行予定（北）：省略

14. 学会創立60周年記念事業（石井）

学会創立60周年記念事業として、学会史をまとめ、公開することが京都大学名誉教授荒木徹会員により提案され、この件について検討を行ったことが報告された。また、本事業を行うことが承認された。今後は、60周年記念事業時限部会を立ち上げ、トピックのピックアップと原稿依頼・募集作業を進め、今期中にまとめる。公開は学会ホームページにて行う予定。（清水久芳）

真、長妻 努、野澤悟徳、山本 衛、清水久芳（12名/ 定足数11人）

欠席者（敬称略）：阿部琢美、小川康雄、北 和之、木戸ゆかり、高橋 幸弘

1. 前回運営委員会議事録の承認（石井）

・承認された

2. 入退会（清水）

入会者4名を承認した。

・入会者（4名）

- 正会員（一般）3名：柴田泰邦（所属：首都大学東京、紹介者：長澤親生・阿保 真）、アルヴェリウス幸子（名古屋大学、関 華奈子・海老原祐輔）、中村琢磨（宇宙航空研究開発機構、中村正人・阿部琢美）

- 正会員（学生）1名：西尾泰穂（東海大学、遠山文雄・大西信人）

3. H18 年度決算報告（山本）

・7月19日に、平成18年度決算に対する監査委員会[監査委員は船木實会員（極地研）と小原隆博会員（NICT）]が開催された。決算資料案には重大な問題はなかった。

4. 国際学術交流事業応募書類審査（石井）

・1件の応募について審査を行ったが、書類不備等の理由により、採択の可否についての結論には至らなかった。今後、再審査を行う。

5. 秋学会（第122回講演会）について（野澤・石川・石井・齊藤）

・秋学会への講演申し込み受付状況が報告された。講演申し込み総数は374件（オーラル180件、ポスター134件、どちらでも可60件）。

・学会のプログラム案（コマ割り案）が提示された。一般講演会を含めたパラレルセッションの状況を再確認し、微調整を行い、コマ割り案を確定した。

・SGEPSS 創立60周年特別セッション案として、開催日時、座長、講演についての案が提示された。9月30日の午後、90分のセッションを予定。講演数は3-5件。

・学生発表賞の本年度の審査員（第1分野2名、第2分野4名、第3分野5名）が決定した。

6. 学会連合について（高橋 [石井代読]）

・7月6日に運営会議が開かれ、2007年の連合大会についての総括がされた。

・将来構想委員会が立ち上げられた。8月より会合が月1回程度もたれる予定。本学会からは、中村

第24期第3回運営委員会報告

日時：2007年 7月20日（日）13:00～18:45

場所：（財）テレコム先端技術研究支援センター 7F 会議室

出席者（敬称略）：歌田久司、津田敏隆、石井 守、石川尚人、白井英之、河野英昭、齊藤昭則、田口

正人会員、本蔵義守会員、石井守会員が参加。

7. アウトリーチ活動について（長妻）

・SGEPSS__アウトリーチWebプロジェクトの目的と進捗状況について報告された。本プロジェクトは、中高生をメインターゲットとしており、将来SGEPSS関連分野についての興味を喚起することを目的としている。現在は、各分野についての内容作成とWeb作成を平行して行っており、秋学会までに雛形をつくることを目標としている。内容等の詳細について、運営委員会で議論を行う。

・秋学会時に開催される一般講演会の準備状況が説明された。

- 開催日時は9月29日13:00-16:00、開催場所は名古屋市科学館。

- 本年は固体地球分野の講演会を行う。講演者は藤井郁子会員（地磁気観測所）と吉田茂生会員（名古屋大学）。

- 本講演会は、名古屋市科学館、STE研、SGEPSSの3者が行う。

8. EPS 関係（齊藤）

・本年度の出版ページ数が増加し、テラパブとの契約である1400ページを超過することが見込まれることが報告された。

9. 男女共同参画関係について（長妻）

・男女共同参画学協会連絡会の活動について報告された。6月に第4回の委員会が開催され、女子高生夏の学校への後援、大規模アンケートの集計ボランティア募集、学協会連絡会への会費納入について、各学会への協力依頼が出された。

・男女共同参画WGによるポスドク問題アンケート調査のまとめ作業について、進捗状況が報告された。

・秋学会期間中に保育室（託児室）が設置される予定。7月下旬までに4家族の保育室使用の希望があった。

10. 会報関係（河野）

・会報に、学生等若手が興味を持って読める記事があったほうがよい、という提言があった。

11. 平成20年秋学会開催地（石井）

・秋学会の開催候補地選定についての報告がされた。

12. 名誉会員の推挙について（石井）

・名誉会員の推挙について、候補者と今後のスケジュールが示された。

13. 集中審議事項

13-1. 会費納入促進のための方策（山本）

・会費の当該年度納入率の向上について、以下の提案がされた。議論の結果、来年度からの実施について承認された。(1) 会費納入通知を3月中に郵送する。また、学会名と会費納入通知であることが一目でわかるような封筒を用いる。会費の納入期限は6月末。学生会員については、継続のための手続きを同時に伝える。(2) 会費の納入期限を明らかにする。3月中に通知する場合には、6月末を期限とする。(3) 会費徴収の作業をモデル化する。

・本年度は、8月中に督促状を出す。また、秋学会において、会費の受け入れを実施する。

・海外会員の納入率向上の方策については、今後検討する。

13-2. 学生会員増加のための方策（清水）

・学生会員増加のための方策案のたたき台が提案され、方針について議論された。方針に沿った具体的な議論を今後行う。

13-3. 国際学術交流の審査方法（石井）

・これまでの国際学術交流助成制度選考上の問題点と改定案が提示され、議論された。変更点は以下の通り。(1) プレゼンテーション能力を高めるという教育的な目的に基づき、わかりやすい言葉で自らの研究をアピールする項目を作り、重視する。(2) 募集時に学会開催時期を指定する。(3) 複数回の採択は禁止する。(4) 専門に近い運営委員が事前に書類を審査し、運営委員会で審議時はその情報を参考にする。(5) 応募資格年齢を引き上げ、応募時に37歳とする。

・上記変更に伴い、申請書のフォーマットを変更する。研究歴、本学会大会での発表が明らかになるようにする。

13-4. 委任状の回収方法（臼井）

・総会委任状回収案のたたき台が提示され、議論された。

・電子ベースの委任状の採用について検討された。セキュリティの問題から、導入に対して慎重な意見があった。しかし、現行の委任状と電子ベースの委任状の両者を用いることによる効果が見込まれることから、学生会員の意見を、学会メールリストや総会にて問うこととした。

・秋学会参加申し込み用紙に委任状を印刷し、総会欠席予定者には、受付時に委任状提出をよびかけることとした。本年の秋学会から実施する。

13-5. 若手会と学会の関係 (石井)

・地球電磁気関連若手会は、現在はSGEPSS 本体と独立の存在として活動しているが、若手会がSGEPSS 傘下の組織であるかのような表現をする例が見られる。現状では、学会としての対応が不可能であるため、以下のどちらかを選択するように、若手会に希望を聞くこととした。

- SGEPSS からの独立性を保ち、SGEPSSの名称、ロゴを用いない。

- SGEPSS の名称を用いるのであれば、分科会になるなど、学会本体とのつながりを明確にする。

14. 次回開催日

運営委員会 9月28日 18:30-21:30

評議員会 9月29日 18:30-20:30

総会 9月30日 15:00-16:30 場所：学会B会場
(野依記念学術交流館 2階会場)

15. その他

15-1. 将来における学会およびEPSのあり方について (歌田)

・連合法人化の際に、連合のもとでの本学会のありかた、連合に対する本学会からの働きかけ、および、連合、EPS、本学会の関係についての意見交換を行った。

15-2. 事前報告・承認事項

15-2-1. 学校教育WG報告 (木戸)

・9月の学会中に会合を持って、最終的な原稿に仕上げる予定。7月18日現在、固体系は、第一回の査読が終了し修正中。超高層は、初稿の作成中。冊子発行に当たっては、内容を運営委員会での承認を得る。

・印刷にかかる費用は、名大STE研の研究集会の予算を一部あてる予定。

・SGEPSS学校教育WG編著の名前を使う予定。学会への必要手続き等を確認中。

15-2-2. 学会創立60周年記念事業報告 (石井)

・この事業については連合大会後にワーキンググループを結成し、メーリングリストを立ち上げて議論してきた。メンバー構成以下の通り。

運営委員会：歌田・石井・臼井・清水・河野
会員有志：荒木徹先生・佐納康治先生

・基本的な資料の準備の一環として、学会会報の電子化を行い、1号から全ての電子化が完了した。152号までは<http://salmon.nict.go.jp/ftp/FPI/SGEADM/kaihou/>

にて、また、153号以降は学会Webにて公開中。

・会長経験者に寄稿依頼の手紙を郵送した。

(第8期上山弘会員以降)

15-2-3. 共催協賛関係(清水)

1) 共催 「第51回宇宙科学技術連合講演会」
(日本航空宇宙学会)

2007年10月29日 - 31日 札幌コンベンションセンター

2) 後援 「惑星ぜんぶ見ようよ」キャンペーン
(自然科学研究機構 国立天文台)

2007年6月1日から2008年5月31日までの1年間

3) 協賛 第25回レーザーセンシングシンポジウム
(レーザーレーダ研究会)

2007年9月13,14日 田沢湖高原温泉郷 駒ヶ岳観光ホテル

4) 後援 平成19年度「女子高校生夏の学校～科学・技術者のたまごたちへ」

(文部科学省、独立行政法人 国立女性教育会館、男女共同参画学協会連絡会、日本学术会议、科学と社会委員会、科学力増進分科会)

2007年8月16日 - 18日 国立女性教育会館
(埼玉県比企郡)

(清水久芳)

評議員会報告

日時 2007年5月21日18時～20時

場所 幕張メッセ国際会議場203号室

出席 家森俊彦、歌田久司、津田敏隆、中村正人、
浜野洋三、深尾昌一郎、藤井良一、本蔵
義守、前田佐和子、向井利典、湯元清文

議事

1. 報告

運営委員会報告

石井運営委員会総務より、第24期第1回および第2回の運営委員会議事概要の説明があった。学会60周年事業について、過去の貴重資料等の保存にも心掛けるよう、要望が出された。

2. 審議

大林奨励賞審査(大林奨励賞候補者推薦委員会) 渡部推薦委員会委員長により、3名の候補者について推薦理由が述べられ、質疑応答があった。審議の後、この3名に大林奨励賞を授与することに決した。

3. その他

連合のもとにおける学会の将来のあり方について、ならびに、学会誌EPSの運営について意見交換を行った。

アジア・大洋州地球科学会 (AOGS) について

- 第4回年会の報告と今後の予定 -

西田篤弘 (AOGS President, 総研大)
 斉藤義文 (AOGS Secretary General, 宇宙研)、佐竹健治 (AOGS Solid Earth Section President, 産総研)

7月31日から8月4日にバンコックにおいて、第4回アジア・大洋州地球科学会が開催されました。約1200名が参加し、ほぼ同数の発表がありました。AOGSは、2004年の第1回大会以来、シンガポールで開催してきましたが、今回は初めて他の国で開催されました。これまで最大の参加者数となり、AOGSが存在感を高めた会議でした。参加者を国別にみると、日本が約4分の1、韓国、中国、タイが約10%ずつで、アメリカ、台湾、インドと続きます。分野別では、超高層と惑星が全体の40%を占め、陸水、気象、固体地球、海洋と続きます。過去の大会では、発表を申し込んだのに参加しない、いわゆるno showが多いことが課題でした。今回は、事務局から事前申請を強くお願いすることにより、口頭発表のno showを約15%まで減らすことができました。

今年の年会中に次期の役員選挙があり、会長(今年度は副会長)には韓国ソウル大学のLee Dong-Kyou氏(気象学)が、事務局長(今年度は副局長)にはシドニー大学のIver Cairns氏(超高層)が選出されました。各セクションのpresidentも選出されましたが、残念ながら日本からはどなたも入っておりません。現在は、我々3名がCouncil memberとして会の運営に参加しておりますが、このままでは2年後には日本からのメンバーが居なくなってしまう。発表だけでなく、AOGSの運営にも、日本から積極的に参加して頂くようお願いいたします。

来年の年会は、6月16~20日に韓国の釜山で開催されます。ソウル大学をはじめとする主要大学や国立研究機関から、大学院生や若手を含む多くの研究者が参加する予定です。セッション提案はすでにAOGSのウェブサイトにて受付けております。ぜひ積極的なご参加をお願いしたいと思います。なお、講演の申込締切は、来年1月24日の予定です。

2009年の年会はシンガポールで開催されます。今後は3年に1回はシンガポールで、それ以外の年はアジアの各地で開催する予定です。

AOGSのウェブサイトは、<http://www.asiaoceania.org/> です。

AOGS 第4回年会 2007年7月30日—8月4日 バンコック
 参加者総数 約1200名

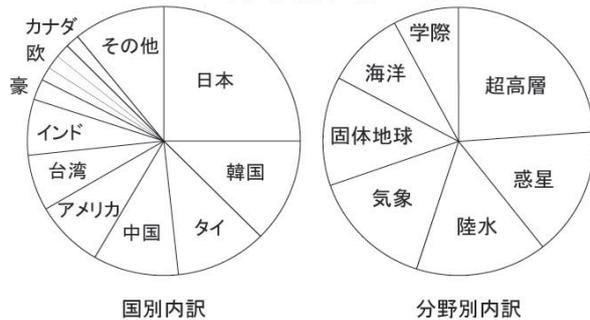


図 参加者の国別(左)と分野別(右)内訳

SGEPSS60周年記念学会史 寄稿のお願い

当学会の前身である日本地球電気磁気学会が1947年に設立されてから、本年は60年目にあたります。人の歩みで言えば還暦のこの節目に当たり、会員の先生方からの寄稿を基にした学会史の整備を記念事業として行うことを運営委員会で議論してまいり、先日の第121回総会でもご報告したところです。

この原稿の募集は広く全会員から行います。学会活動を通じて会員の皆さんの印象に残るトピックスを中心としたご執筆・ご寄稿をぜひお願いします。取りまとめた学会史については基本的に学会ホームページから電子的にアクセスし閲覧できる形とするほか、冊子体については希望される会員に実費にて頒布することを検討しています。

投稿は電子メールにて以下の専用アドレスにお送りいただければ幸いです。あるいは、学会総務宛にご郵送いただいても結構です。

投稿専用アドレス sge60th@viola.nict.go.jp

(総務 石井 守)

秋学会会場での会費納入

平成19年度秋学会の会場に会費支払い窓口を設けます。開設日時は、9月29日(土) 13時~18時と30日(日) 9時~16時です。

会場にて会費を納入されたい方は総合受付までお越しください。

黎明期SGEPSSの 指導者像と足跡

加藤 進 (第10期会長、1979 - 1980)

1. はじめに

1947年、SGEPSSの前身、日本地球電気磁気学会（以下、その英語名に従いJGGと記す）が創設された。私は、それから5年後の1952年、京大地球物理学教室卒業の直後、このJGGの会員になった。まだ戦後と呼ばれた時代で、日本は貧しく、自信も持てない時代だ。

それから、60年経ち、今や還暦を迎えたこの学会の歴史を振り返るにあたり、私が会長を務めていた時代を主として、記すように依頼された。だが、現在学会に出席してみると、私より古い会員が出席していないのに気がつく。すると、今回、私の他に、黎明期、初期の学会について語る者がいないのではないかと。そんな気がして、この期間について、私が記すことにした。最も初期の名誉会員であった田中館先生、中村清二先生、また最初の会長であった長谷川先生、その後の会長であった、永田先生、前田先生、加藤先生、関戸先生に関して、エピソードも交えながら記したい。彼らこそ学会の基礎を固めた方々といえるだろう。

記すに当たり、勝手ながら、当時の学生の気持ちに帰り、人物の呼称は当時の習慣に従った。異様とを感じる方には、あらかじめお詫びしておく。教授は必ず、助教授（准教授）・講師はしばしば、先生と呼び、助手（助教）や先輩は、“さん”付けにした。同輩、後輩には“君”を使った。でもこれは、一般的な習慣だったが、厳密に行われた習慣でもない。

その頃の笑い話だ。夜、京大に外線電話があり、大学の交換手がでると、「何々教室の何々先生につないでください」と申し込まれた。たまたま、その何々先生を知っていたその交換嬢が言うには、「その方は居られますが、先生ではなく、助手ですが
- 。」今聞くと、これはおかしな話に思われるだろう。でも、敬語は、今より厳密に使われていた時代でもあった。

2. 群像

2-1. 田中館愛橘先生

私がJGGに入る1年以前、京都でJGGの総会・講演会（以下、単に、学会と呼ぶ）が開かれた。私はまだ3回生の学生だったが、学会開催の雑用係り役として出席が許され、初めて「学会のにおい」をかぐことができた。この学会には、学会初代名誉会員である

田中館愛橘先生が来訪された。90歳代半ばの高齢である先生の歩行を心配した京大の太田柱次郎先生は、階段を降りる田中館先生に付き添うように、私に命じた。早手を貸そうとする私に、「そんな必要ないよ」と先生は強く言われた。先生はお元気に思えたが、翌年亡くなられた。先生が、静かに、学会の発表を聴いておられた姿を今でも覚えている。先生は東京帝国大学初期の物理学教授であり、地磁気研究の草分けである。先生は、First Polar Year (第1回国際極年、1882年)に日本は参加ができないのを残念と思われ、東京赤坂（現、港区六本木2丁目1番地；測地学から地球システム科学へ、測地学審議会の100年、p200、平成11年発行）で、1883年、地磁気観測をおこなった。このFirst Polar Yearから丁度1世紀後、Second Polar Year とも言えるMAP (1982 - 1985年)が行われたが、その記念に、MAP委員として私も現地を訪ねた。

田中館賞は先生に因んだ賞であり、最初の受賞者は力武常次さんだ。私がJGG入会以前の1948年のことだ。以後、毎年、1 - 2名の受賞者が選ばれ、今日に及んでいる。私は1959年、この受賞者に選ばれ、大変うれしく、光栄に思った。学会の総会で、学会会長（当時委員長と呼ばれた）であった長谷川万吉先生から賞状とメダルを頂いた。その日夕べ、懇親会では、田中館先生のご令嬢（当時、60歳代）から、記念品を田中館家のお祝いとしていただき、さらに、彼女のお酌でお酒を一杯頂いた。彼女は着物が似合う女性で、声があでやかで若いのが印象的であった。その後も、しばらく、彼女がお元気であった間は、この楽しいshowが続けられたと聞く。私は、この受賞後、しばらく学会には出席できなかったため、その頃については、情報不足だ。これは、当時初めて導入された京大計算機KDC1のお守り役として、休日返上で働く専任講師に命じられていたからだ。

田中館先生のお姿に重なって、老齢の名誉会員中村清二先生が学会の講演会に出席しておられた姿を思い出すが、この先生とは言葉も交わしたことはない。ただ、当時、「中村物理学」と題した書籍が本屋の棚に並んでいたことは知っていたが、読む機会はなかった。

2-2. 長谷川万吉先生

長谷川先生と永田先生の提案で、JGGが創設されたと聞く。それ以前から、長谷川先生は、研究成果が出ると永田先生を訪ねては議論する、こんなお二人の間柄だったらしい。あるとき、長谷川先生が病気で寝ている永田先生の枕元に現れ、しつこく議論を始めた話が伝わっている。長谷川先生は創設から13

年間、会長を務められたが、学会に強い愛着を持っておられたことは、先生の研究室に属していた私にはよく分かった。学会では、あまり厳しい質問をされるので、卒倒した発表者がいた。

先生はSq電流渦の中心緯度が、日々変動する状況を、1930年代、丹念に調べられた。これにS. Chapman先生が注目し、有名な教科書Geomagnetism (Chapman and Bartels, pp 238-242, 1945)に載せ、成果を詳しく紹介している。この長谷川先生のオリジナル研究論文を、日本学士院のプロシーディング(英文)に掲載するよう推薦したのは、田中館先生である。また、JGGは、Chapman先生を1968年名誉会員に選んだ。

この長谷川先生のSq研究は、1950年日本学士院賞授賞の対象になった。その後、先生の門弟により、このSq研究は電離層電磁力学の発展に繋がり、いくつかの重要な成果が生み出された。たとえば、広野求和さんによる赤道ジェット電流の理論だ。これは、Sqの電場が流す赤道の垂直ホール電流が、塞き止められた結果、非常に大きな垂直分極電場が発生する。この分極電場が、さらに、強いホール電流を東西に流す。つまり、ジェット電流がもつ大きなeffective conductivityが発生する。これが理論の骨子だ。広野さん以外に、内外の研究者から、同じような理論が出されたが、広野理論がもっとも簡潔明瞭で、見事だ。国際的に高く評価されたのは、当然だろう。ごく最近(2007年)、九大の宮原三郎君グループが、この効果を組み入れた、グローバルSqシミュレーションに成功したと聞く。

他のひとつの成果は、1960年代に出された「大気潮汐古典論」である。この創作者は私自身だ。19世紀末、Sq電流の起電力は大気潮汐運動により地球磁場の作用で発生するという説が出された。だが1950年代まで、地上観測に基づいて、大気潮汐は主として12時間周期であり、それが地球大気の特性であるという理論(半日潮汐共鳴論)が信じられていた。これが誤りであることが判明したのは、太平洋戦争後、ロケットによる地球大気温度測定、特に、成層圏温度の極大値が実測され、理論が仮定したよりずっと低温であることがわかったことによる。それにより、それまでの共鳴理論が成立しなくなった。そこで、大気潮汐論への正しい挑戦が始まった。当時、やっと電子計算機が科学研究に使われるようになっており、京大電子計算機KDC1もこの時代に導入された。私がこの京大計算機利用組織の中核にいたので、幸運にも、初めてラプラス潮汐方程式を正しく解くことが可能になった。かくして、Sqの研究の発展が、門弟の私の仕事になり、これに成功した私

も、1989年学士院賞を受賞した

この話は、ここで終わっていない。古典潮汐論は、大気潮汐の基礎を確立したが、現実にみられる大気潮汐は、途轍もなく複雑で、日々大きく変動している。たとえば、日々変動するSq電流の目玉の緯度は、地上から電離層までひろがる大気の現実の変動すべてを考慮して、初めて理解できるはずだ。これを解決できるのが、現在の大気大循環モデル、GCMだ。もともと、天気予報のために開発されたGCMは複雑な現実を再現できる計算機シミュレーションシステムである。上述した九大の宮原君グループが開発したGCMは世界の最高レベルにあり、地上から、高度500kmまで伝播する大気潮汐運動を再現できる。成果はSGEPSSの機関誌EPSにも発表された。70年余にわたる学会の素晴らしい発展の歴史の一面を物語る。

2-3. 永田 武先生

長谷川先生の後、1961-62年、永田先生が第2代会長を務められた。先生は、もともと岩石磁気学者で、1951年その研究業績で学士院賞を受けておられたが、これについての私の理解は乏しく、ここで説明できない。だが、学会講演会が1会場で開かれた初期時代には、岩石磁気を含むすべてのJGG分野の講演を聴いていたので、各分野の中心課題のニュースを皆知っていた。先生の説明による「地球磁場逆転」のニュースは、驚きと感動を与えた。そして広い分野で、永田先生の伝統を土台に、門下生達が新しい開拓を進めてきたことは確かだ。

さて、学会会場での永田先生の鋭い質問も、発表者を緊張させた。先生の質問は本質を突くものである。それに驚き、感心もした。しかし面白い質問もあったと思う。上述した広野さんの赤道ジェット電流理論については、「電気伝導度は、そもそも、物質固有の性質であるから、電流が流れた結果、電気伝導度が増すとは理解できない」と。面白い質問であると思う。

永田先生と長谷川先生の親しい交友のおかげで、東大と京大間の研究上の競争が早くから行われ、学問が切磋琢磨を通して発展していった意義は大きい。だが、長谷川先生派は主としてSqの研究、永田先生派は擾乱磁場の研究と区別はあった。そして共に発展し、前者が潮汐による中層大気・下層大気とのカップリング研究へとつながり、後者は磁気圏・太陽風研究へとつながった。両先生が築いた伝統が、その後の門下生に受け継がれたと言える。西田篤弘君の仕事も然りだと思ふ。彼も

学士院賞を受賞している。ここで特筆すべきは、早くから永田先生は大気の光学的研究の重要性を指摘し、畏友故等松隆夫君を育てたことだろう。彼と私はMAP計画推進のために働いた戦友でもあった。

南極観測事業は永田先生の偉業だ。これは1958年のIGY事業の目玉であり、敗戦に苦しむ日本人に大きな希望と自信を与えた。それから半世紀、極地研究所の新しい発展が期待されている。先生が南極に出発する壮行会は、長谷川先生の肝いりで、京都の「枳殻邸」で行われ、私も参加した。その席で先生は、「私は、東大教授になり、学者として、目指した頂点に立っている。いまさら、これ以上は望まない。南極から生きて帰れないとしても本望だ。」こんな要旨の挨拶をした。冗談を交えた酒席の挨拶だが、妙に心を打った。まだ、日本人は日々悲壮な現実から開放されていない。

2-4. 前田憲一先生

前田先生は、永田先生の次の学会会長だ。前田先生は、電気工学者であるが、日本での電離層研究の草分けでもあり、学士院賞の受賞者である。先生にまつわる話を記しておく。

電離層の「Appleton Anomaly」とは、電離層最大電子密度が磁気赤道に対して、南北磁気緯度に対して、対照的に分布し、磁気赤道が極小、南北磁気緯度30°辺に極大をもつ分布となっていることだ。これは、前田先生と共同研究者により、Appleton (1946)より早く1942年に発見されていた。戦後かなり経ってから、この状況が国際的にも認知されたが、それまでは、日本語の報告書にしか載っていなかったもので、日本の発見は知られていなかった (Fifty years of the ionosphere, J. Radio Res. Lab., p.p. 103-167, Vol. 33, 1986)。

長谷川先生と前田先生にも、早くから交友があったと聞く。前田先生の存在は、工学(特に電波工学)と理学の協力を必要とするJGGにとって大きな意義がある。事実、戦後、米国占領軍の一員として先生を訪ねた将校が、電離層研究者であった。彼の好意で「連合軍最高司令官」のお墨付きが得られ、電離層観測・電波研究は、恐れた戦犯扱いではなく、逆に大いに奨励され、必要な組織の拡張も勧告された(前田憲一先生退官記念集、昭和48年)。また、上述したAppleton Anomalyの発見には、地磁気緯度分布をしらべることを提案した地磁気学者の協力があつたかもしれない(これは長谷川先生から直接聞いた話)。

前田先生は一貫して電離層研究に取り組まれたが、それ以外に、永田先生とともに、東大宇宙航空

研究所の創設者の一人として、日本の飛翔体観測の実現と発展に貢献しておられる。

前田先生が京大電子工学教授として赴任された数年後、1955年、私は前田先生の研究室に雇われた。当時、来るべきIGYに備えて、前田先生が、電離層観測器の作成に取りかかっていた。その仕事に必要な技官として私が参加し、前田先生の門下生となった。だが、前田先生には、以前から長谷川研究室で何度もお目にかかっていた。長谷川先生を通してこの話が来たとき、「技官だが、前田先生の許では、研究もできるだろう」との広野さんの薦めが、私の気持ちを決めた。私の以後のキャリアもこのとき決まった。

私は、このとき電離層観測の技術の勉強を始めた。やがて、京大電子計算機の導入に際し、その要員になり、計算機工学の勉強もできた。「兵隊の位」では、上述したように、講師となった。これらの体験は、10年余の後、私が行ったMUレーダー建設計画には不可欠だった。

ここで記しておきたい人物がいる。JGGの名誉会員のMartyn先生だ。彼は、オーストラリア人で、戦時中、英国において、軍用レーダーの開発をしたが、戦後オーストラリアに帰り、電波天文学、電離層物理学の研究で、国際的リーダーになった。電離層電波伝搬には彼に因んだ「マルチンの定理」があり、これは、その頃広く知られていた。彼はHinesに先んじて、重力波の研究をして、TIDを説明した。彼がcellular waveと名づけた重力波の理論は、気象学者である京大の山元竜三郎さんにより、核爆発で起こる大気波動の検出に応用された。Martyn先生も学会初期の名誉会員である。

Martyn先生は、電離層irregularityに関する私の論文を読んで、彼が所長を務める研究所に招待したいと伝えてきた。私にとって、これが、再び電離層研究に戻る機会となった。ここで2年を過ごしたが、この頃、日本は漸く、電波望遠鏡建設の計画に向かって動き始めていた。日本での電波天文学研究の重要性を唱えた畑中東大教授の門弟数人が、私と同じ研究所の違った部門に留学していた。だが、電波望遠鏡についての知識は当時ほとんどなかったと彼らが言っていたのを覚えている。それから20年後、すばらしい野辺山電波望遠鏡が完成することになるとは、私には、まったく予想できなかった。この電波望遠鏡建設の時期、われわれは、MUレーダーの建設に向かっていたが、MUレーダー建設は、ある程度予想されていただろう。なぜなら、前田先生ご自身、先生の同僚、また門下生の多くは、電波工学者だったからだ。なにはともあれ、今や日本の電波

天文学は、規模・活動において、隆盛を極めてい
る。時とともに歴史は急速に変わって行くこともあ
るのだ。

2-5. 加藤愛雄先生

加藤先生は前田先生から、会長職を引き継がれ
た。思えば、会長は選挙で選ばれるにも関わらず、
当然と思える順番に選ばれている。年齢ではなく、
学会とのかかわりの順序で、自然に決まった、私は
こう理解している。

加藤先生は長谷川、永田、前田諸先生と異なり、
私とのつながりは少ない。学会開催期以外、加藤先
生にお目にかかったことはない。先生の良く知られ
た仕事は、マイクロ・パルセーション（当初は
 dH/dt と呼ばれたと覚えている）で、これが、世
界中、同期して起こる電磁流体波であることを発
見した。先生も日本学士院賞を受賞された。加藤
先生の門下生は、磁気圏物理学、特に電磁流体理
論の研究発表で学会をにぎわせた。さらに、やが
て東北大では、研究分野が惑星電波、大気光学観
測にまでひろがり、特に、最近の九大と協力して
発展している藤原君のGCM研究は、学会に新しい
流れを作っている。

2-6. 関戸弥太郎先生

SGEPSS (JGG) の創設から丁度20年、学会初期
を締めくくったのは、関戸先生であり、1967年に
会長に選ばれた。先生は宇宙線研究の純粋物理學
者で、名大研究室のボスだった。私は宇宙線に関し
ては門外漢だが、先生の話は素人分かりするもので
あったと記憶している。先生は地球に飛来する宇宙
線が地球磁場、電場で影響されることに興味を持ち
JGGに入られたらしい。

京大教養部の助手である若い長島さんの研究を高
く評価し、先生の研究室の助教授に招いたが、この
先生の卓見に私は感動した。しかし、時には、先生
の卓見には、落とし穴もあったと理解している。そ
のひとつが、SOLTERTRON だろう。先生が学会会長の
頃だ。

STP (SOLAR-TERRESTRIAL PHYSYCS) 観測デー
ターを総合解析するシステムをつくり、その目的
に役立つ設備を備えよう、これが先生の提案だっ
た。太陽電波、黒点、太陽風、宇宙線、電離層、
地磁気等々、すべての観測データを自動的にな
らべ、刻々、STPの総合的変動を目で見るよう
にしたい、こんな夢は、確かに、斬新な卓見であ
った。今で言う宇宙天気図だが、当時、計算機シ
ステムは今のPCと違って、多様なデータを同じシ
ステムで簡単に処理することはできず、先生の夢

は間もなく消えた。

永田先生もこの計画実施にのった。だが、実働部
隊の私は、実際、磁気テープにあるアナログデー
ター、穿孔カードにあるデジタルデータ、しかも
両者の時間分解能も違う、こんなものを、自動処理
するなど到底できないことを思い知らされた。

しかし、先生と議論していると、いつの間にか、
次々とする先生の奇抜な卓見にしばしば虜になっ
た。これを懐かしく思い出すことがある。ただ、先
生の創られた大きな宇宙線望遠鏡施設を一度ならず
拝見した私が、その設備の活動について、先生の卓
見をじっくり伺う機会が来なかったことを残念に
思っている。

3. おわりに

以上述べた学会初期の指導者はすべて亡くな
れた。彼らはあの敗戦後の貧しい時代に学会を創
設し発展させた。私が学会会員になったときには、
日本人が飢えに苦しんだ時代は去っていたが、ま
だまだ、日々の生活の質はまことにみじめ
であった。われえわれの研究生活などはひどいも
のだった。地磁気、電離層観測データが唯一に
近いデータであり、計算できる数値の桁数も少な
い電動機計算機が頼りであった。

この厳しい環境で、研究が目的としたものは、
現象を支配する基本的物理学法則の発見だとい
える。「アイデアのひらめき」だけが勝負を決める
のだと思っていた---。従って、学会での議論も
多い。そして時間だけは十分ある講演会だ。そんな
時代のそんな研究を、見事に牽引し、走らせたのが
黎明期、初期の指導者だった、こう私は思う。

訃報

謹んでご冥福をお祈りいたします。
杉浦正久会員 2007.8.13逝去(81歳)
アラスカ大学Ph.D 1955取得
アラスカ大学・NASA/GSFC・京都大学・
東海大学

地球惑星科学関連学会合同 大会発足の頃を振り返って

行武 毅(第15期会長、1989-1990)

今年(2007年)の連合大会の折に荒木徹さんから、学会60周年記念事業として編纂される学会史に、合同大会発足の頃の経緯について寄稿するようにとの依頼を受けました。実は昨年連合大会懇親会で合同大会発足当時の思い出話をしたのがきっかけです。荒木さんも聞いておられたのでした。その時は手許に資料もないまま、気楽に話をしたのですが、書き物として残すのであれば、いかに思い出話しとしても少しは確かなところを確かめねばと感じていました。そこへ最近の会報(191号)に木村磐根さんがWestern Pacific Geophysics Meeting (WPGM) 開催の経緯を実に丹念に資料に基づいて寄稿しておられるのを拝見して、ますます資料に当たる必要性を感じました。

懸命に古いファイルを探し出して愕然としました。3箇所の間違った思い込みをしていたのです。まずは開催時期。WPGMが開催されて、それを契機に合同大会が開かれたと思っていたのですが、WPGMは1990年8月、合同大会は1990年4月で合同大会の方が4ヶ月先行していました。二番目は参加学会。地震学会、日本火山学会に我々の学会の3学会でスタートしたと思ったのが、実はさらに日本測地学会、日本地球化学会を加えた5学会で共催しています。測地学会、地球化学会には大変失礼しました。さらに合同学会開催については当学会から地震学会への働きかけが発端だと信じていたのですが、1989年5月の運営委員会議事録では地震学会より地球物理各学会に対する合同学会開催申し入れの共同提案学会となるように依頼があり承諾した、となっているのです。間違った認識でお話をして申し訳ないことでした。ここに改めてお詫びする次第です。

さて、正確を期す積もりですが、なにしろ資料という資料がほとんど手許にありません。再び過ちを犯すのではないかと危惧します。お読みになってお気づきの点があればお教示願えれば幸いです。

先に書いたように、私はつい最近までWPGMの後を受けて国内の合同大会を立ち上げたものと思い込んでいました。我々の学会では永い間学会連合、合同学会の開催について検討してきましたからWPGMより先に合同大会を開いても不思議はないのですが、何がきっかけで1989年早々に地震学会から合同大会の提案がでたのか、地震学会との間にどういうやりとりがあったのか、いまでは思い出せません。もちろ

ん、固体地球物理学界最大の学会である地震学会が動かないことには合同学会など不可能なことです。これは極めて順当な提案でした。当時地震学会の会長は京都大学防災研究所で新進気鋭の安藤雅孝さんでした。安藤さんが会長でなければこの合同大会の実現は困難だったでしょう。

当時すでにWPGMの準備は着々と進んでいました。木村さんによると1988年には地震、測地、地球化学、海洋、火山、気象、地質の各学会、陸水グループに我々の学会で連絡会が結成されておりました。私共は合同大会をこの連絡会を基盤に展開できないかと期待したのですが、この連絡会はWPGMの準備だけのためのものであるとして、とりつく島がなかったという印象を持っております。

そこで地震学会と我が学会は合同大会への参加を各学会に働きかけました。当学会の総務は当時地震研究所に在職中の浜野洋三さん、地震学会の庶務委員長はやはり地震研究所の山下輝夫さんで実質的な面で大変活躍をして貰いました。合同学会というからには火山学会にはどうしても参加して貰わないと困ると先ず考えました。火山学会内部の取りまとめは当時火山学会の幹事長を務めておられた兼岡一郎さん(地震研究所)が尽力して下さいました。7月(1989年)の評議員会まで諾否の返答は難しいということでしたが、幸い評議員会で認めて貰うことができました。その後、秋の総会で承認していただいたのだと推測しています。開催まで半年しかない急な話でした。当時の会長は加茂幸介さん(京大防災研究所)でした。その後萩原幸男さん(地震研究所)が会長をしておられた日本測地学会および綿抜邦彦さん(東大教養学部)が会長の日本地球化学会にも参加していただけることになりました。このようにして地震学会、日本測地学会、日本火山学会、日本地球化学会および我々の学会の5学会で合同学会を1990年春に開催することが決まりました。

しかしもうひとつ大きな難問がありました。それは会場の問題です。大きな学会を開く訳ですから多数の会場がしかも安い経費で借りられるところでなければなりません。これは大学をにおいて外には考えられません。そこで学会共催を他の学会に働きかけるにあたって先ず会場探しを行いました。東京都内でこれまで大きな学会を開催した経験のある大学や多数の会場候補を擁する大学などに当たってもらいましたが、いずれも断られてしまいました。今回はこれで万事窮すかと合同大会の開催を諦めかけていました。その時本蔵義守さんから連絡があり、東京工業大学で4月上旬の入学式までの間の4月5-8日の4日間会場を準備できるというのです。早速予約して

もらいました。いつの事だったか記憶しておりません。5月上旬の運営委員会の議事録では、地震学会から共同提案の申し入れがあったことと同時に東京工業大学が会場候補地として報告されていますから、各学会に働きかけを始める前の5月には会場の手当てはできていたこととなります。

とにかく5学会で合同学会開催の見通しが立ち種々の準備が進められました。ひと安堵していたのですが、私にとってはもう一つ山場がありました。このままでは第1回の合同大会は成立しても1回限りに終わってその後の継続性の保証がないということに気付きました。随分後になってのことです。1990年3月に慌てて地震学会と共同で各学会に提案しました。この方式を3年間継続して3年目にその後も継続して開催するかどうか検討しようというものです。さらに常置の委員会を設置して今後の合同大会の企画運営に当たり、併せて学会連合についても議論しようという提案でした。この提案は合同大会の際の総会で各学会とも検討されました。議論はあったかも知れませんが、参加各学会とも承認してくださって、少なくとも3年間の継続開催が保証されました。また関連学会連絡会が設置され、当学会からは福西さん、本蔵さん、浜野さんが委員として参加されました。

第1回の合同大会はなにしろ初めてのことでありますし、河野 長さん、本蔵さん始め東京工業大学の方には実に大変な苦勞をおかけしました。とにかく未経験の事が数々起こったでしょうが、東京工業大学の方々の献身的な働きによって第1回合同大会は成功裡に終わることができました。各学会がその後の3年間の継続を承認されたのもこの大会の成功振りを見てのことだと思えます。

合同大会を開くための学会間の連絡会はあったと思いますが、なにより浜野さん、本蔵さん、兼岡さん、山下さん、歌田さんなどの志を同じくする人々の活躍によって合同大会の開催にこぎつけることができました。さらにこの合同大会が成功したのは、大勢の方々のご協力、ご激励によるものです。

私が会長として関係したのはここまでです。第2回合同大会は共立女子大学の八王子キャンパスで開催されました。共立女子大学では杉 憲子さんが地震学会の唯一の会員で他に地球科学関係者は誰もおられず一人で副学長と交渉したり会場の準備をしたり大変奮闘されました。外部から石橋克彦さん等地震学会の方が全面的に支援され開催が実現したようです。もちろん大会の企画運営については、第1回の合同大会で結成された学会間連絡会が大きな役割を果たしたことは言うまでもありません。浜野さんも水

面下で随分助言助力しておられるようでした。第3回大会は京都大学教養部で開かれ住友則彦さんが苦勞して下さいました。第4回大会は都立大学で開催されましたが、事情が共立女子大学の場合とよく似ています。測地学会に所属しておられた石川甲子男さんが都立大学で唯一人地球科学関連学会員でした。国土地理院内の測地学会事務局をはじめ測地学会会員の方々の強力な支援によって成功裡に開催されました。

ところで気掛かりなことが2点ありました。ひとつは気象学会、海洋学会との関係でした。会員の中に現業官庁の職員を多数抱えている学会は4月上旬の人事異動の時期に学会に参加するのは困難であること、翌年の学会開催についてはすでに決定済みであること、などの理由で合同大会には参加されませんでした。実質的な解決策としては気象学会、海洋学会の有志を含んだ特別のセッションなりシンポジウムを開くということで対処するよりないだろうというのが我が学会内の考えでした。第1回の合同大会の時は、特別セッションに割り当てるだけの時間的余裕がないから代わりに気象学関係の特別招待講演を頼んだらということになり、松野太郎さんに地球温暖化の講演をお願いしました。その後は深尾昌一郎さんたちが共同シンポジウムを開くなどいろいろ努力されたと理解しています。もうひとつの懸念は学会連合の問題であります。我が学会は絶えず他学会に働きかけを行ってきましたが、少しも事態が動かなかった問題です。その後河野 長さんや本蔵さんが随分努力されましたけれども、これは難問だったようです。しかし今の連合学会では両方の問題とも解決しており喜ばしいかぎりです。

合同大会はそのうち学会支援型から各大学独自主催型となり、参加学会も増えていよいよ盛会になりました。と同時に、開催するのに大変な労力が要るようになり負担が増加しました。そして地球科学関連学会の会員を多数擁する有力大学を一巡するとついに引き受け手がなくなるという状況になったのでした。この危機を救ってくれたのは浜野さん、木村学さん、中村正人さんなどの東京大学地球惑星科学科の人達でした。開催の労だけでなく事務局をも引き受けてくださり合同大会は継続されました。その後の紆余曲折を経て今日の体制に至っています。5学会の合同大会から出発して、いまや幕張メッセ国際会議場で6日間の連合大会を行うまでに成長し、さらに40を越す学会の加入する学会連合が出来上がったと聞くとまさに隔世の感があります。ここに至るまでの関係者の苦勞は大変なものであったろうと推察します。どうかこの大会を基盤に地球科学が一層進

展することを祈ります。異分野を統合する学際的研究が展開され、また一方で新しい芽が生まれ育つことを念願してやみません。

追記：学会史ワーキンググループの石井 守さん、佐納康治さんらによって会報の編集が進んでいて、それを見せて頂くことができました。また学会関係資料について荒木徹さんから種々ご教示をいただきました。

会報127号によると第1回合同大会での特別講演、共通セッション、シンポジウムは次のようなものでした。括弧内は世話人。

特別講演

「地球温暖化について」

気象関係：松野太郎（東大理）

火山関係：H. Sigurdsson (Univ. Rhode Island)

共通セッション

1. 惑星・衛星の起源と進化（松井孝典・中川義次）
2. 地球内部構造（川崎一朗・浜野洋三）
3. テクトニクス（瀬野徹三・乙藤洋一郎）
4. 地殻変動（岡田義光・竹本修三）
5. 重力（河野芳輝・里村幹夫）
6. 電磁場で見た地殻・マントル・核（笹井洋一・田中穰）
7. 地震予知・火山噴火予知（岡田弘・吉田明夫・野津憲治）
8. 火山活動（浜口博之・渡辺秀文）

シンポジウム

「地球中心核」（深尾良夫・本蔵義守・八木健彦）

国際学術交流事業助成金受領 のご報告

The University of Newcastle
尾花由紀

この度、国際学術交流事業の補助をいただき、2007年7月にイタリア・ペルージャで開催されましたIUGG 2007に参加させていただきましたので、ここにご報告申し上げます。

私の住むオーストラリア・ニューカッスルからイタリア・ペルージャまでの道のりは、これまで経験した中で最も長距離、かつ長時間の移動となりました。諸事情から少々遠回りのフライトを余儀なくされたこともあり、家を出てから3つの都市で1泊ず

つ宿泊し、ようやく目的地・ペルージャに到着しました。真冬から真夏へ、そして9時間の時差を越えての移動です。数日間は時差と季節差による違和感が消えませんでした。

開催地であるペルージャは、エトルリア人が基礎を築いたという古い古い歴史を持つ美しい町です。丘の上に築かれた旧市街地は細い路地が立体的に入り組み、まさに迷路のようです。空いた時間に足の向くまま、迷路に迷い込むのも町歩き醍醐味でした。

IUGGで、私はIAGAセッションにて二つの口頭発表を行いました。

まずはじめは'Ion Refilling Rates for L = 2.3 - 3.8 Flux Tubes'です。磁力線共鳴振動数から磁気圏プラズマ密度を推定する手法は、近年多くの研究で用いられておりますが、私どもの研究ではL = 2.5 - 3.8における磁気嵐前後のプラズマ密度を連続的に観測し、磁気嵐回復相におけるプラズマ再充填率と電離層からのプラズマ上昇流のフラックスを高精度に求めることに成功しました。発表後の質疑では、J. Goldstein博士始め数名の方に大変貴重なコメントをいただき、また、今後の研究の発展につながる有り難い提案をいただくなど、有意義な発表となりました。

もう一つの発表は'Quarter Waves Detected by Cross-phase Analysis'です。磁力線両端の電離層環境が極端に非対称になったときに励起され得る、4分の1波長モードの磁力線共鳴振動をcross-phase法を用いて同定することに成功しました。発表後の質疑において、I. Mann教授より本質を突く質問をいただき、研究の重要性を補完的にアピールする事が出来ました。

休憩時間やIAGAセッションのディナーの席などで海外の多くの研究者と親交を深められたことも、大きな収穫でした。ペルージャという魅力的な町の雰囲気そうされるのか、AGU Fall Meetingなどの近代的な都市の大コンベンションセンターにおける大



会における緊張感とは明らかに異なる、参加者同士の強い一体感を感じました。そのなかで、暖かく、密度の濃い交流が出来たことが強く印象に残っております。

最後になりましたが、本事業の助成をいただくことで、貴重な成果を得ることが出来ました。ここに本学会関係者のみなさまに厚く御礼申し上げます。今後も、本事業が発展的に継続し、多くの若手研究者に国際会議へ参加する大きな支援となりますことを心より祈念し、ご報告に代えさせていただきます。本当にありがとうございました。

国際学術交流事業補助金受領 の報告

北海道大学大学院 長谷英彰

この度、本学会の国際学術交流事業の補助を頂き、2007年7月2日から13日にかけてイタリアのペルージャで開催されたIUGG XXIV General Assemblyに参加させて頂きました。貴重な機会を与えてくださった本学会関係者の方々に厚く御礼申し上げ、その成果についてご報告させていただきます。

今回私は「Progress in electromagnetic studies on earthquakes and volcanoes - Volcanic structure and activities」というセッションで「Interpretation of SP anomalies at the summit area of Kaimondake volcano, Japan」というタイトルでオーラル発表を、「Distribution of water and heat in the crust: Indication from EM studies」というセッションで「Interpretation of self-potential anomalies on Usu volcano, Japan」というタイトルでポスター発表をさせて頂きました。口頭発表の内容は自然電位観測地域においてサンプリングした岩石のゼータ電位を測定し、地

下水流動によって発生する流動電位を岩石ユニットごとに評価してシミュレーションを行った研究で、単純な地下水流動だけでもポジティブな自然電位アノマリーを形成することが可能であることを示唆しました。発表の内容はセッションコンピナーのJ. Zlotonicki氏をはじめ多くの方々に強い関心を持って頂きました。ポスター発表では有珠山における詳細な3次元流体流動ならびに自然電位のシミュレーション結果に関する研究で、観測された自然電位の3次元的地形の影響をシミュレーションから示唆した内容の報告を致しました。本学会のポスター会場は2つに分かれており、同じ研究分野の発表が分かれていた影響のためか予想よりもポスター会場に訪れる人が少なく残念だったのですが、1人1人に議論を深く交わすことができたのは結果的に良かったと思っております。

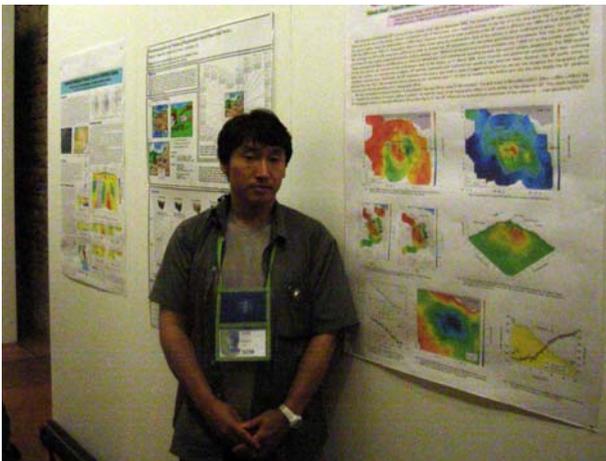
今回の学会開催期間中ペルージャではジャズフェスティバルが開催されており、市街地の複数のステージで昼間から演奏が繰り広げられていました。夕食は市街地の通りにあるレストランで取ることが多かったのですが、ステージから聞こえてくる演奏を聞きながら各国の研究者と議論できたことは大変貴重な体験でした。最後に今後もこの国際学術交流事業が継続され多くの若手研究者に国際学術交流の機会が与えられることを希望し、今回の支援に対して改めて感謝申し上げます。

男女共同参画提言WG報告

1. 男女共同参画学協会連絡会の活動

第5期では(委員長:美宅成樹)、5年目という節目にあたり、第1期から第3期にかけて行われた大規模アンケートの結果や提言を踏まえ、さらに具体的な施策を講じる資料として計画である。参加学協会に集計や解析を分担してもらう関係上、できるだけ負担の少ないWeb回答の準備が進められている。アンケート調査は、8月下旬~10月にかけて実施される予定であり、実施の際には改めて周知する予定であるが、当学会会員からの積極的な回答への協力をお願いしたい。また、第6期学協会連絡会幹事学会を日本地球惑星科学連合が担当することになった。

・今年で3回目となる「平成19年度女子高校生夏の学校」が110名の高校生を迎えて無事終了し、SGEPSSも後援団体として名を連ね、長妻委員が、企画・運営をサポートするとともに、ポスターセッションにおいて当学会の紹介およびキャリア相談を実施した。



・第5回学協会連絡会に先立ち、勉強会がもたれ、前田佐和子会員が、「ポストク・任期付き研究者のキャリア形成とライフサイクル」というタイトルで話題提供を行った。なお前田会員は、女性研究者・技術者全国シンポジウムや科学者会議等でも、本件の問題提供を行っている。

2. アンケート調査

WGでは、昨年、大学・研究機関における有期限雇用の研究職に関するアンケート調査を実施し、期限までに152件（内、学会員137件）の回答が得られた。集計・分析結果は、すでに5月の連合大会一般公開セッション「地球惑星科学の明日を考える 男女共同参画の視点から」にて、口頭発表とポスター発表がなされ、ポストクや若手研究者像の現状が浮き彫りにされ、各年齢層の研究者像に対する多様な捉え方、考え方などが明らかにされ、たいへん興味深い内容となっている。アンケートの項目も多岐にわたり、包括的な内容であるため、多方面から問い合わせが来ており、物理学会からは、学会誌でのポストク企画に執筆の依頼が来る等、注目を浴びている。この秋に報告書の最終版を完成させる予定である。

3. 秋学会の保育室の設置・利用

第122回講演会においても、学会期間中の保育室を設置する予定である。名古屋大学のご協力により、学内の保育園の一時利用制度を利用させていただけることになった。学会期間1週間前まで、利用希望を受け付ける。

（木戸ゆかり、長妻 努、田口 真）

アウトリーチ部会活動報告

1. 秋学会アウトリーチイベント準備状況

今年秋学会期間中の9月29日（土）に名古屋市科学館でアウトリーチイベント「地球のひみつ～見えない地球の中を探る～」を当学会と名古屋大学太陽地球環境研究所、名古屋市科学館の3機関の主催で開催します。講演は「地磁気で見よう 地球の中身（藤井郁子会員）」、「なぜ磁石は北を指すのか？ ～地球中心核のひみつ～（吉田茂生会員）」の2件で、毎年好評の「おしえて はかせ！コーナー」や展示を行う予定です。現在開催に向けて、PRのためのポスター作成など、部会メンバーを中心として準備が進められているところです。

2. アウトリーチWeb準備状況

現在、SGEPSSアウトリーチ活動のWEBを大幅にVersion Upすべく準備を進めています。新しい内容とその目的としては、主に中高生を対象に

・SGEPSSの研究分野紹介の一環として、一般、特に中高生が興味を持ちそうな項目について、わかりやすい解説を作成し、啓蒙・知識普及・興味育成を図る。

・上記の項目について、それについて勉強できる大学、研究を行っている研究所等（SGEPSS会員の所属する）を紹介することで、SGEPSS分野に興味を持つ中高生・大学生が大学・大学院選びをするための情報発信を行い、その分野の人材育成の一助となる。

・上記の項目について教えられる講師情報を紹介するという形で、SGEPSS講師派遣システムの利用促進を目指す。

3. その他

アウトリーチ部会では、講師派遣システムを整備し、運用しています（<http://www.ele.kochi-tech.ac.jp/masayuki/SGEPSS/outreach/3/>にて「講師紹介・派遣」をクリック）。現在、31名の学会員が登録されています。講師派遣システムへの登録を希望される方は、sgepss_khp@yahoo.co.jpまでご連絡下さい。また、近くで出前授業や講師派遣の要望がある方に、当学会のこのシステムをご紹介しますと思います。

また、アウトリーチ部会では、部会の活動に協力していただけるメンバーを常時募集しております。学会のアウトリーチ活動にご興味があるかたは、長妻（tnagatsu@nict.go.jp）までご連絡下さい。よろしくお願い致します。

（長妻 努、北 和之）

日本地球惑星科学連合ニュース 第5号のお知らせ

このニュースは、日本地球惑星科学連合加盟学協会の会員の方々への連絡事項を年2回配信するものです。

<http://www.jpogu.org/publication/news/No05.pdf>からご覧ください。

関連研究集会のご案内

公開シンポジウム「地球環境の 心臓 赤道大気の鼓動を聴く」 開催のお知らせ

文部科学省科学研究費補助金（特定領域研究）「赤道大気上下結合」（領域長：京都大学名誉教授 深尾昌一郎、研究期間：平成13～18年度）では、インドネシア・スマトラ島の赤道直下に位置する赤道大気レーダーを中核として多様な観測装置を集積し、対流圏から成層圏・中間圏を経て電離圏・熱圏へと至る赤道大気の力学的な上下結合について多くの研究を実施してきました。本研究から得られた研究成果を広く社会に公開するため、下記の要領で2日間にわたって公開シンポジウムを開催いたします。

日時：平成19年9月20日(木) 13:00～17:35

21日(金) 10:00～16:25

場所：東京国際交流館・プラザ平成国際交流会議場

(ゆりかもめ「船の科学館」駅から徒歩3分)

TEL 03-5520-6001 FAX 03-5520-6011

<http://www.tiec.jasso.go.jp/>

本公開シンポジウムは文部科学省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公开发表(A)」によって開催されるもので、どなたでも参加できます。参加は無料ですが、事前申込が必要です。詳しくは下記のホームページをごらんいただくか、事務局にお問合せください。

専用ホームページ：<http://www.kuba.co.jp/cpea/>

連絡先：(株)クバプロ内 シンポジウム事務局

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋3-11-15 UEDAビル6F

Tel: (03) 3238-1689, FAX: (03) 3238-1837

E-mail: symposium@kuba.jp

関連公募のご案内

教員の公募について

立教大学理学部では、以下の様に物理学科に所属する教授または准教授1名 助教3名の公募を行います。

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/dept-phys/Koubo07/Koubo07.html>にも掲載しています。

記

1. 公募人員： 教授または准教授、1名
2. 専門分野： 地球大気圏・磁気圏を含めた太陽系惑星科学分野で、飛翔体ならびに地上観測・実験を通して研究を進めている方
3. 担当科目： 物理学科専門科目、大学院物理専門科目、ならびに全学共通カリキュラムの自然科学系分野科目、卒業研究、大学院院生の研究指導
4. 着任時期： 2008年4月1日
5. 任期： なし（定年は65歳）
6. 応募資格： 博士の学位を有する方。45歳未満が望ましい。
7. 公募締切： 2007年10月5日(金)（必着）
8. 提出書類：(1)履歴書（連絡先、e-mail アドレス等を明記すること）(2)研究業績リスト（査読誌、その他に分割すること）(3)主要論文5編 以内の別刷り（コピー可）(4)競争的資金導入実績リスト（特許等の実績も 含んでよい）(5)研究業績の概要（2000字程度）(6)今後の研究・教育の抱負（1500字程度）(7)照会可能な方2名の氏名・所属・連絡先（電話、E-mail アドレス等）
9. 書類提出先：〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1立教大学理学部物理学科 栗田和好
10. 問い合わせ先：同上 北本 俊二
電話 (03)3985-2419
E-mail: kitamoto@rikkyo.ac.jp
11. その他：封筒に「応募書類（太陽系惑星科学）在中」と朱書きし、簡易書留で送付のこと。応募書類は原則として返却しない。必要に応じて面接を行うことがある。提出していただいた個人情報については、教員任用業務、連絡、手続きのためのものであり、他の目的に使用することはありません。

1. 公募人員： 助教 1名
2. 専門分野： 宇宙高エネルギー現象の観測的研究分野。当該研究室の北本 俊二教授と協力して研究できる方
3. 担当科目： 物理学科専門科目
4. 着任時期： 2008年4月1日
5. 任期： 任用契約期間は1年とする。ただし、契約の更新は4回を限度として行うことができる。
6. 応募資格： 博士の学位を有する方。30歳代なかば以下が望ましい。
7. 公募締切： 2007年10月5日(金)（必着）
8. 提出書類：(1)履歴書（連絡先、e-mail アドレス等を明記すること）(2)研究業績リスト（査読誌、その他に分割すること）(3)主要論文5編 以

内の別刷り（コピー可）(4)競争的資金導入実績リスト（特許等の実績も 含んでよい）(5)研究業績の概要（2000字程度）(6)今後の研究・教育の抱負（1500字程度）(7)照会可能な方2名の氏名・所属・連絡先（電話、E-mail アドレス等）

9. 書類提出先：〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1立教大学理学部物理学科 栗田和好
10. 問い合わせ先：同上 北本俊二
電話 (03)3985-2419
E-mail : kitamoto@rikkyo.ac.jp
11. その他：封筒に「応募書類（宇宙高エネルギー）在中」と朱書きし、簡易書留で送付のこと。応募書類は原則として返却しない。必要に応じて面接を行うことがある。提出していただいた個人情報については、教員任用業務、連絡、手続きのためのものであり、他の目的に使用することはありません。

1. 公募人員： 助教 1名
2. 専門分野： 理論物理学における宇宙物理学分野
3. 担当科目： 物理学科専門科目
4. 着任時期： 2008年4月1日
5. 任期： 任用契約期間は1年とする。ただし、契約の更新は4回を限度として行うことができる。
6. 応募資格： 博士の学位を有する方。30歳代なかば以下が望ましい。
7. 公募締切： 2007年10月5日(金)（必着）
8. 提出書類：(1)履歴書（連絡先、e-mail アドレス等を明記すること）(2)研究業績リスト（査読誌、その他に分割すること）(3)主要論文5編 以内の別刷り（コピー可）(4)競争的資金導入実績リスト（特許等の実績も 含んでよい）(5)研究業績の概要（2000字程度）(6)今後の研究・教育の抱負（1500字程度）(7)照会可能な方2名の氏名・所属・連絡先（電話、E-mail アドレス等）

9. 書類提出先：〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1立教大学理学部物理学科 栗田和好
10. 問い合わせ先：同上 柴崎徳明
電話 (03)3985-2389
E-mail : shibazak@rikkyo.ac.jp
11. その他：封筒に「応募書類（理論物理学宇宙）在中」と朱書きし、簡易書留で送付のこと。応募書類は原則として返却しない。必要に応じて面接を行うことがある。提出していただいた個人情報については、教員任用業務、連絡、手続きのためのものであり、他の目的に使用することはありません。

1. 公募人員： 助教 1名
2. 専門分野： 理論物理学における素粒子物理学分野
3. 担当科目： 物理学科専門科目
4. 着任時期： 2008年4月1日
5. 任期： 任用契約期間は1年とする。ただし、契約の更新は4回を限度として行うことができる。
6. 応募資格： 博士の学位を有する方。30歳代なかば以下が望ましい。
7. 公募締切： 2007年10月5日(金)（必着）
8. 提出書類：(1)履歴書（連絡先、e-mail アドレス等を明記すること）(2)研究業績リスト（査読誌、その他に分割すること）(3)主要論文5編 以内の別刷り（コピー可）(4)競争的資金導入実績リスト（特許等の実績も 含んでよい）(5)研究業績の概要（2000字程度）(6)今後の研究・教育の抱負（1500字程度）(7)照会可能な方2名の氏名・所属・連絡先（電話、E-mail アドレス等）
9. 書類提出先：〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1立教大学理学部物理学科 栗田和好
10. 問い合わせ先：同上 矢彦沢茂明
電話 (03)3985-2410
E-mail : yahiko@rikkyo.ac.jp
11. その他：封筒に「応募書類（理論物理学素粒子）在中」と朱書きし、簡易書留で送付のこと。応募書類は原則として返却しない。必要に応じて面接を行うことがある。提出していただいた個人情報については、教員任用業務、連絡、手続きのためのものであり、他の目的に使用することはありません。

学術賞・研究助成のご案内

笹川科学研究助成

財団法人日本科学協会では、昭和63年度から日本財団の助成金を受けて、真に質の高い社会の実現に向け、優れた科学研究を格段に発展させるため、科学研究の将来を担う人材の育成とその研究を奨励し、他からの研究助成が受け難い研究の全国的な掘り起こしを行い、もって科学研究の振興を図ることを目的とする研究助成事業を実施しております。

この事業は、人文・社会科学および自然科学（医学を除く）に関するものを対象にし、萌芽性、新規性および独創性のある内容をもった研究内容で、意欲に満ち優れた研究を行う若手研究者の育成のため、その研究に対する助成を行うものであります。

特に、今年度より、特色ある制度の確立のため、従来の「一般科学研究」および「海洋・船舶科学研究」を対象とした<学術研究部門>と、これまでの「学芸員、図書館司書等がおこなう研究」助成を発展させ、教育・学習・自立支援等の様々な現場における社会的要請の高い研究への支援を目指す<実践研究部門>の2部門にしました。

募集期間は平成19年10月1日～15日(必着)です。
詳しくは以下のサイトをご参照ください。
<http://www.jss.or.jp/sasagawa/apply/apply.html>

猿橋賞

「女性科学者に明るい未来をの会」(1980年創立)は、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者に、毎年、賞(猿橋賞)を贈呈しております。賞金は、本会を母体として設立された公益信託(1990年3月13日文部省認可)「女性自然科学者研究支援基金」(受託者:UFJ信託銀行)から支出されません。

猿橋賞の推薦

2008年度「女性科学者に明るい未来をの会 猿橋賞」の募集を開始しました。

募集要領は以下の通りです。

1. 本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者(ただし、下記の推薦締切日で50才未満)に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞金(30万円)を添えます。
3. 本賞の贈呈は、1年1件(1名)です。
4. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(800字程度)、略歴、推薦者(個人・団体)、及び主な業績リストを記入して、主な論文別刷10編程度(2部ずつ、コピーも可)を添え、7.の送付先までお送り下さい。
5. 締切は2007年11月30日(必着)です。
6. 第28回の贈呈式は、2008年5月、東京において行う予定です。
7. 推薦書類送付先:
〒168-0071
杉並区高井戸西3-6-26 古在由秀方
女性科学者に明るい未来をの会

(封筒には、「猿橋賞推薦書類」と明記して下さい。書類は、猿橋賞選考のために選考委員会などで用いられます。書類は返却いたしませんのでご了承下さい)

日本女性科学者の会奨励賞

日本女性科学者の会(大島範子会長)は「女性科学者の友好を深め、各研究分野の知識の交換をはかり、女性科学者の地位の向上を目指すとともに、世界の平和に貢献すること」を目的として1958年4月に設立されました。以来、公開講演会、公開シンポジウムなどの活動を行ってきています。2002年には日本学術会議の登録団体(第4部 科学教育)となり、現在も日本学術会議協力学術研究団体としてさまざまな形で協力をしています。

本会は女性研究者を援助、支援するために1995年から「日本女性科学者の会奨励賞」を設け、これまでに24名の女性研究者が受賞されています。

第13回(2008年度)につきまして下記のように募集いたします。

1. 対象者

自然科学分野で研究業績をあげ、その将来性を期待できる者であり、かつ本会の目的に賛同し、その達成のために努力していると認められる本会会員(応募時入会可)。特に年齢、国籍、性別は問いませんが、管理職(教授、部長等)にある方はご遠慮下さい。

2. 奨励賞

賞状および奨励金20万円(年1-3件以内)
本会総会(例年6月)において贈呈

3. 公募書類請求期間

2007年10月1日(月)～10月31日(水)
事務局へはハガキでご請求下さい。なお、WEB(<http://www.sjws.jp/>)からも応募書類をダウンロードできます。

4. 応募期間

2007年11月1日(木)～11月15日(木)必着

5. 決定時期

2008年3月末(郵便にて本人宛て通知)

6. 応募書類請求先・送付先

〒305-8566 茨城県つくば市東1-1-1 中央第6
産業技術総合研究所 生物機能工学研究部門
日本女性科学者の会賞連絡事務局
佐藤 縁 理事宛
FAX:029-861-6177
e-mail:award13-sjws@m.aist.go.jp

学会賞・国際交流事業関係 年間スケジュール

積極的な応募・推薦をお願いします。詳細は学会ホームページを参照願います。

賞・事業名	応募・推薦/問い合わせ先	締め切り
長谷川・永田賞	会長	2月28日
田中館賞	会長	8月31日
大林奨励賞	大林奨励賞候補者推薦委員長	1月31日
学生発表賞	推薦なし/問合せは運営委員会	
国際学術交流若手派遣	運営委員会総務	平成19年度は5月上旬、7月中旬 9月中旬、2月中旬を予定
国際学術交流外国人招聘	運営委員会総務	若手派遣と同じ

SGEPSS Calendar

- 2007-09-17~09-22 IAU Symposium No.,. 247 Waves and oscillations in the solar atmosphere:
Heating and magneto-seismology(Isla de Margarita, Venezuela)
- 2007-09-20~09-12 公開シンポジウム「地球環境の心臓 赤道大気の鼓動を聴く」
(東京国際交流館・プラザ平成、東京都江東区青海)
- 2007-09-24~09-28 4th Alfven Conference : The importance of Plasma Processes in Planetary
Physics and Astrophysics (Arcachon, France)
- 2007-09-28~10-01 SGEPSS秋期総会・講演会 (名古屋大学、名古屋市千種区)
- 2007-10-23~10-27 International CAWSES meeting (京都大学、京都市左京区)
- 2007-11-27~11-29 大気化学研究会 大気化学討論会 (名古屋大学野依記念館、名古屋市千種区)
- 2007-12-10~12-14 AGU Fall meeting (San Francisco, USA)

地球電磁気・地球惑星圏学会 (SGEPSS)

会長 歌田久司 〒113-0032 東京都文京区弥生1-1-1
 東京大学地震研究所 海半球研究センター
 TEL: 03-5841-5722 FAX: 03-3812-9417 e-mail: utada@eri.u-tokyo.ac.jp

総務 石井 守 〒184-8795 東京都小金井市貫井北町4-2-1
 独立行政法人 情報通信研究機構 電磁波計測研究センター
 TEL: 042-327-7540 FAX: 042-327-6163 e-mail: mishii@nict.go.jp

広報 北 和之(会報担当) 〒310-8512 茨城県水戸市文京2-1-1 茨城大学理学部
 TEL: 029-228-8400 FAX: 029-228-8400 e-mail: kita@mx.ibaraki.ac.jp
 河野英昭(会報担当) 〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6-10-1
 九州大学理学部地球惑星科学科
 TEL: 092-642-2671 FAX: 092-642-2684 e-mail: hkawano@geo.kyushu-u.ac.jp

運営委員会(事務局) 〒650-0044 神戸市中央区東川崎町1-8-1 プロメナ神戸16F
 (株)プロアクティブ内 地球電磁気・地球惑星圏学会事務局
 TEL: 078-366-5057 FAX: 078-366-5051 e-mail: sgeps@pac.ne.jp

賛助会員リスト

下記の企業は、本学会の賛助会員として、
地球電磁気学および地球惑星圏科学の発展に貢献されています。

エコー計測器(株)

〒182-0025
東京都調布市多摩川2-3-2
tel. 0424-81-1311
fax. 0424-81-1314
URL <http://www.clock.co.jp/>

NEC東芝スペースシステム(株)

〒224-8555
横浜市都筑区池辺町4035
tel. 045-938-8230
ext: 8-399-2590
fax. 045-938-8324
ext: 8-399-2559
URL <http://www.ntspace.jp/>

クローバテック(株)

〒180-0006
東京都武蔵野市中町3-1-5
tel. 0422-37-2477
fax. 0422-37-2478
URL <http://www.clovertech.co.jp/>

(有)テラ学術図書出版

〒158-0083
東京都世田谷区奥沢 5-27-19
三青自由ヶ丘ハイム2003
tel. 03-3718-7500
fax. 03-3718-4406
URL <http://www.terrapub.co.jp/>

(有)テラテクニカ

〒206-0812
東京都稲城市矢野口 2
tel. 042-379-2131
fax. 042-370-7100
URL <http://www.tierra.co.jp/>

日鉄鉱コンサルタント(株)

〒108-0014
東京都港区芝4丁目2-3いすゞ芝ビル5F
tel. 03-6414-2766
fax. 03-6414-2772
URL <http://www.nmconsults.co.jp/>

富士通(株)宇宙システム部

〒261-8588
千葉市美浜区中瀬 1-9-3
富士通システムラボラトリ
tel. 043-299-3247
fax. 043-299-3012
URL <http://jp.fujitsu.com/>

丸文(株)営業本部航空宇宙部 計測機器課

〒103-8577
東京都中央区日本橋大伝馬町 8-1
tel. 03-3639-9821
fax. 03-3661-7473
URL <http://www.marubun.co.jp/>

明星電気(株)宇宙機器技術部

〒372-8585
群馬県伊勢崎市長沼町2223
tel. 0270-32-9777
fax. 0270-32-0988
URL <http://www.meisei.co.jp/>